

急ぎの歐米旅行より歸りて

山 本 一 清

去る6月19日の早朝に横濱を出帆して、9月24日の夕暮れに同じ横濱に歸着するまで、前後97ケ日の忙しい歐米旅行が、恙なく茲に終わりました。公用としては、8月3日から同月10日までスウェーデン國の首都ストックホルムで開かれた國際天文同盟總會に出席するのにありましたが、滯歐中に圖らずも寸暇を獲て、永く望んでゐたチウリングヤに遊び、マルチン・ルーテルや、ゲーテの遺蹟を親しく視ることが出来たのは、嬉しい思ひ出となります。

旅行の日程としては、大體に豫定してゐたコースに従ひ、

6月19日--7月5日	17ケ日(日附變更線通過のために1日を加ふ) 横濱よりロスアンゲレス港へ、太平洋横斷。
7月5日--同 13日	8ケ日 ロスアンゲレスよりニューヨークへ、米大陸横斷。
7月14日--同 22日	9ケ日 ニューヨークよりハムブルグへ、太西洋横斷。
7月24日--8月2日	9ケ日 ドイツ、デンマルク、スウェーデンの各地を巡遊、主として中部ドイツに於けるルーテルの遺蹟を訪ふ。
8月3日--同 10日	7ケ日 國際天文同盟總會のため、スウェーデン國の首都ストックホルムに滞在。
8月10日--同 12日	2ケ日 スウェーデン、デンマルク、ドイツを経て、オランダ國ロテルダム港へ。
8月13日--同 24日	11ケ日 ロテルダムよりニューヨークへ、太西洋横斷。
8月25日--9月7日	13ケ日 ニューヨークより、ピッツバーグ、シカゴ及びサンフランシスコ經由ロスアンゲレスへ、米大陸横斷。
9月7日--同 24日	16ケ日(日附變更線通過のため1日を省略) ロスアンゲレス港より横濱へ、太平洋横斷。

私は“旅容”を持つて海外に出張したのは、これが6回目ではありますが、しかし、こんどは比較的短かい期間に、太平洋と太西洋とを、何れも往復しましたため、總計97ケ日のうち、53ケ日を船のキャビンで暮したわけで、旅行日數全體の55%、即ち半ば以上を、海上に送つたのは、空前のことであり、又、多分、絶後のことともなませう。——幸ひに、この變化激しい旅行中、身體は極めて強健で、軽い風邪一つ引かず、始め、用心のため、它から持つて出た二つ三つの藥など、全部、封も切らずに、又こゝに持つて歸りましたのは、幸福

でありました。

最初に、横濱から乗つた“**照國丸**”は、神戸の川崎汽船會社の所有船で、元々デンマルク國で建造したものであると云ふのも、北歐へ行く私の旅立ちの船として不思議な因縁と考へられます。噸数は約6500トンで、一寸碎氷船の形に似たモダン貨物船ですが、川崎汽船では、國力發展の現代に應ずるため、最近年この船を購入し、可なり思ひ切つた改造を内部に加へ、一見殆んど新造船かと思ふほどに手を入れ、この6月の出帆は、米國ニウヨークに處女航海の門出でありました。勿論、スピードも優秀で、往航の途中の或る日など、時速15.93マイルを走つたことがあります。エンジンはディーゼル式です。

乗り合ひの船客は、神戸商大の岡野氏と私と、2人きりでしたが、各々廣々としたキャビンをつづき貫ひまして、朝夕、好きな日本食をたべ、日本服に日本語といふ生活でした。私は、こんどは、例に似ず、船へ夥しい荷物を持ち込んで、長い航海中、ゆつくり研究と調査と論文執筆と讀書とをしました。

船は7月2日の午後、金門橋の下をくぐつて、**サンフランシスコ**港の第45號岸壁に着きましたが、之れが土曜日、翌日が日曜、更に其の翌日が米國獨立記念日といふので、荷役は多少延びました。其のため、恰も市内マーケット街に於いて獨立祭の盛大な公式パレードを見る機会を獲ました。

私は、始めは、此の船で、パナマを経由して、ニウヨークまで乗る豫定でしたが、急に、太西洋横斷の船便の都合上、**ロスアンゲレス**港で下船し、陸路をニウヨークへ急ぐこととなりました。

アメリカの汽車には、私は可なり馴れてゐる自信があります。それで、今回は、ロスアンゲレスからニウヨークまで、若干の用事を果しつつ、成るべく今まで經由しなかつた道を取らうと企てました。そして、鐵道會社で買ひ求めましたクーポンにより、ロスアンゲレスからオグデンまで南太平洋鐵道、それからセントルイスまではワバシ鐵道、セントルイスからシンシナチとワシントンを経てニウヨークまではボルチモア・オハヨ鐵道によることになりました。

オグデンの手前では、かのモルモン宗で有名な**ソルト・レイキ**市を見ました。セントルイスへは、クラーク博士に會ふために下車したのですが、或は、よほど以前に亡くなつたものか(？)、誰も詳しい事状を知りませんでした。それで、

其の翌日ワシントン府に下車した序でに、舊知のブラシ博士をコングレス圖書館に訪ね、クラーク博士の事蹟の調査を依頼して置きました。

ワシントンでは、例により海軍天文臺を訪ね、ロバートソン博士から南米ブラジルに於ける1940年十月1日の皆既日食線の位置(未發表のもの)を示され、寫し取りました。此の時、偶々リウイス夫人から“昨1937年六月8日のペルに於ける日食の接觸時刻”に關する私の觀測が、カントン島に於ける米國隊の觀測とよく一致し、誠に見事な成績であつたと賞められました。

ワシントンでは、又、スミソン學院にアボト博士を訪ね、太陽熱の變動と天氣との關係について最近研究の模様を聴取し、ストックホルムで再び御目にかい入る約束で、別れました。

七月11日にニウヨークに着き、船會社や、銀行や、其の他いろいろの用事をすませて、13日に第86號突堤から“ドイツランド號”に乗り込み、翌朝、夜半過ぎ満月光を浴びつゝ出帆しました。

ドイツの船は私は初めてですが、20000トンの此の船は整頓もよく出来、秩序や訓練も見事で、航海は誠に心地よく、速力は平均毎時20哩を出しました。海上は幸ひに波少なく、又、多少の風浪にも船は殆んど揺れない装置が備はつてゐて、流石、こゝは世界航路中の大往還であることを思はせました。

船は、太平洋を乗り切つて後、アイルランドの**コブ**港、フランスの**シエルボルグ**港、及び英國の**サザンプトン**港に寄りましたが、何所も、沖に投錨して、ランチで客や荷を運びました。又、英國海峡は、こんどは案外に波が静かでしたけれど、霧が深くて、多くの船舶が霧笛を吹きながら往き交ふ有様は些か不安の心を人に抱かせましたが、之は杞憂でした。

七月22日正午、船はハムブルグ外港たる**ククスハーフェン**に着きました。船上の客と、陸上の出迎ひ人たちが、早くから右腕を舉げてナチス式の挨拶をなし、又、盛んに國歌など歌ひ交はしたのは、見てゐて、嚴肅な感じを受けました。——其の夕暮れ、汽車でハムブルグに運ばれましたが、折から観光客が殺到して、ホテルは皆殆んど満員でした中に、漸く一つの空室をライクスホーフ・ホテルに見つけた有様でした。

ハムブルグは私は14年ぶりですが、未知の場所が多いので、1日、C. V. J. M.

(基督教青年會)のオビツ君に連れられ、アルスタ1濱から市廳廣場、新舊のスタインエヒ通り、ビスマルク記念像、海洋觀象臺、エルベ濱、河底トンネルに至るまで一順しました。

北歐の會議地に行くまで約10日間の餘猶があるのを利用し、ドイツの中部のチウリングヤあたりを巡歴する計畫を、既に船中で立て、周遊切符も買ひ求めましたので、愈々七月24日の朝、宿を出で、**ブレ1メン、ハンノフア、ゲチンゲン、アイゼナハ、エルフルト、ワイマア、イエナ、ライプチヒ、アイスレーベン、キテンベルヒ**、ベルリンの順序に、楽しみつゝ獨り旅をしました。ブレ1メンは百年前の偉大なるアマチュア天文家オルバースの遺蹟、ハンノフはプラネタリウムとライプニツの家、ゲチンゲンでは有名な大學の構へや、ガウス、エ1ベル等の遺蹟、イエナではカール・ツァイス會社の訪問等を主な目的としましたが、其の他の市々では、四百年前の宗教家ル1テルの跡を尋ねるのを主目的としました。只ワイマアは序での道寄りで、ゲ1テの家に半日を費したばかりでした。

アイゼナハも、エルフルトも、アイスレーベンも、キテンベルヒも、(イエナでさへも)皆その土地の人々は“ル1テル都市”と呼んでゐます。實際、第16世紀の前半、ル1テルは此の古典的な町々を縦横に活動したのでせうが、今この一介の旅行者が、慌だしい夢を追ひながら經巡つた印象としては、何と言つてもワルトブルグの古城の内外、エルフルトの大學や修道院の跡、アイスレーベンの川舎びた町角にあるル1テルの生誕の家や、其の臨終の家、キテンベルヒの博物館と、又、“城内教會”の中にメランヒトンと共に眠るル1テルの墓など、いつまでも忘れられぬものであります。——巡遊の道順も、偶然ながら、私が採つた順序が良かつたと思ひました。ワルトブルグ城はル1テル遺跡巡禮の壯麗なる序曲で



アイスレーベンのル1テル像

あり、キテンベルヒは其の大詰めにふさはしい重みと内容とを有つて居ます。(若し之れを逆の順路で巡つたとしたならば、キテンベルヒの豊富な博物館と、整備した城内教會とを先づ見たことによつて、其のあとのアイスレーベンや、イエナや、エルフルトは言ふまでもなく、ワルトブルグ城でさへも、多少の物足りなさを感じたであらう。)

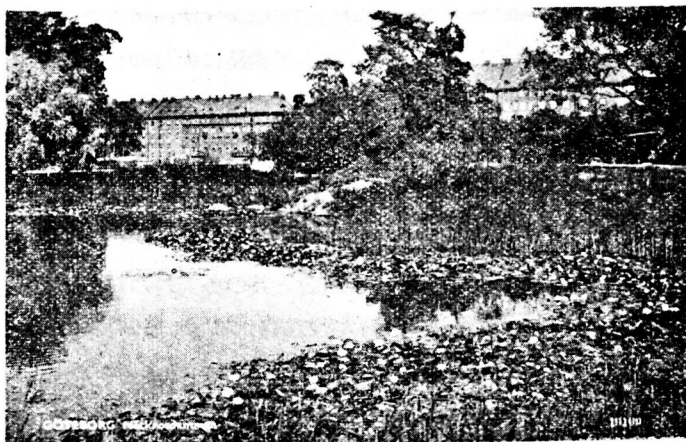
チウリングヤの森や町々の道を通りぬけて、ベルリンには七月30日に到着しましたが、こゝでは現代ドイツの典型的な緊張ぶりを見たことと、久しぶりで日本食をたべたことだけでした。其の翌日は又ハムブルグに立ち戻つて、午後の半日をハーゲンバックの動物園に費しましたのも、單なる暇つぶしでありました。

八月1日から愈々北歐に向ひましたが、元來スカンデナ维亚は、私に取つては初めての土地ですけれど、近年、友人などから種々此の地方の事情を聞いてゐましたので、出立の前から私はかなりのあこがれを持つてゐました。只、こんどの旅行に、日数が少いため、充分な視察は決して出来ないものと諦め、止むなく、出来るだけ希望に近いプログラムを立てたのでした。それで、多少の無理と不便を忍んで、先づハムブルグから眞つすぐに汽車で一路北上、デンマルクの北端に近いフレデリクスハーブン港まで縦斷しました。と言っても、國が小さいので、只之れは僅々10時間の旅でしたが、しかし、途中では、キール運河の眺め、フレンスブルグに於ける新しい獨丁國境の狀景、デンマルクの物靜かな田野や、平和な牧場の風景、フレデリシャの海峡と大橋、アールースやアールブルグの都市景觀など、尙ほ又、乗り合ひ客や、汽車のボーイの親切に至るまで、此の一日の旅は誠に嬉しいものでありました。

フレデリクスハーブンから對岸のスエーデン國ゴテボルグ港まで、バルチック海の入口をなすカテガト海峡の渡船も、可なり世間ばなれのものでした。此の甲板上から見た波に沈んで行く赤い太陽の最後の美しい緑閃光は、5秒時間にもわたる立派なものでした。あとから、16ミリのフィルムに撮影すれば良かったと残念がりましたが。

スエーデン國隨一の商港ゴテボルグの夜景と、翌朝の街々や公園の景色など、之れが瑞國の第一印象でしたが、此所から、首都ストックホルムまでの汽車の旅

も亦ほゞ豫想を裏切らない愉快なものでした。車窓の景色に變化もあり、空氣は清澄、氣候は冷涼で、眞に晴れやかな、世を超越した心地でした。今更なが



ゴテボルグの公園の一部

ら中部ヨーロッパの(否、歐米は言ふに及ばず、全世界の)政治的、社會的にも物理的にも、にごつた有様と比べて、北歐の別天地の良さが感ぜられました。

旅行の大目的たる國際天文同盟總會は豫定の如く八月3日から始まりました。私は開會前日の2日に **ストックホルム** に到着し、直ぐ其の日から、届出でや其の他職務上のいろいろの事務が始まりました。開會式は市の音樂堂で開かれましたが、學術上の議事は皆國會議事堂の大小各室で催されました。3回の總集會のほか、何しろ31種の委員會が毎日入り亂れて行はれるのですから、皆々非常に忙はしく、殆んど會ひたい人にも、開期中は遂に會へないことさへある有様でした。私は、組織上、又、研究上、流星、太陽黑點、變星、文獻、彗星等の委員會に出席し、又別に黃道光委員會の座長をも勤めましたし、尙ほ恒星のスペクトル問題や、宇宙構造論等の聯合會にも列席しましたので、毎日眼のまはるやうにさへ感じました。

嚴密な學術會合のほか、開期の8日間には、王宮への御招待を始め、市長主催の歡迎會や、瑞典國內委員の主催による午餐會や、晚餐會や、其の他、サルチエバーデン海濱や天文臺への案内、多島海への巡航、ウプサラ學都や古ウプサラへの外遊、スカンセン天然公園やプラネタリウムへの案内など、又、ハル

ヴーデ大學天文臺關係者の懇親會共の他いろいろの催しがあつて、世界各地から來會した 500 人の者相互が、充分に舊交を温め、新交を結び、誠に楽しく嬉しき日夜を暮しました。——來會者の約半數はアマチュア天文家や、退職學者であります。此等いろいろの人と共に、平素特に人なつかしかりの公私天文家たちが、遠近から久しぶりに一ヶ所に集まつたのですから、其の賑々しく、などやかな空氣は、ストックホルム市の中央部に溢れて、可なり異常な風景とも見えたことでせう。

八月十日、最後の日、午前の總集會では、各委員會で決した決議案を上提、全部承認し、午後の會では、次期の委員會と其の各委員の顔ぶれを定め、尙ほ新同盟長にはエデントン教授を挙げ、次の第七回總會は 1941 年にスエスで開くことも満場一致で賛成。こゝに日出度なく閉會しました。

私は、尙 3 ヶ年間、黃道光委員會を主裁し、其の委員を任命する權能を與へられましたほか、流星と、日食との、各委員會のメンバーに推薦されました。尙ほ、彗星と、文獻との各委員長からは、今後の研究について重要な若干の依頼を受けました。

私は閉會式の其の日の夕刻、驛頭で萩原博士の見送りを受けて、**ストックホルム**を出發し、**マルメー**、**コペンハーゲン**、**ゲゼル**、**ワルネーミュンデ**を経て、三度び**ハムブルク**に歸着し、荷物を引き纏め、直ぐ又汽車に乗り繼いで、翌朝**オランダ國のロテルダム港**に着き、其の、夜“**フオレンダム號**”に乗つて、**ニウヨーク**へ出帆しました。當時、歐洲全般はチエコ・スロヴキヤ國をめぐる不安の空氣がたゞよひ、ドイツは今ライン地方に百萬の豫備軍を動員して、未曾有の大演習をやつてゐましたので、オランダの此の船中でも、船客は日夜無電ニウスを待ちこがれる有様でしたが、ブローメと、サザンプトンとに寄港した後は、一直線に太西洋を横切り、八月 23 日の夕暮れ、**コニー・アイランド**の燈火美しい**ニウヨーク港**内に無事到着、投錨して一夜を過した後、翌朝、客は一同上陸しました。

歸路のアメリカでは、私は**フィラデルフィヤ**、**ハリスバーク**、**ピツバーク**、**シカゴ**の道順を採り、八月 29 日**サンフランシスコ**に着き、翌日此の港から我が帝國に向ふ**ペルー國**の經濟文化使節團の一行を載せた龍田丸の出帆を見送つた後、再び

南下してロスアンゲルスに歸着し、數日の船待ちの間に長田、高村、高木、3氏等と、モハベ沙漠で暁天に黃道光を觀察したり、又、ロス市内では、日系第二世たちのパレードや、勞働祭の行列等を見る機會を得ました。

それから、私は九月6日、最初渡航の「**黒川丸**」に又々乗り込むこととなり、乗り合ひの岡野君も同じまいで、翌7日ロスアンゲルス港を出帆しました。船は満船の荷物を積んで、二週間餘の航路を、ほぼ北緯35°の線に沿つて取りつゝ、横波に多少揺れつゞけましたが、いよいよ日本に近づいた頃、小笠原方面から來る颱風におびやかされつゝ、巧みに其の影響を避けて、九月24日午後目出たく横濱港内に入りました。

前後一百日未滿の旅で、太平洋と、太西洋と、北米大陸とを往復し、あはたゞしい國際風雲のみなぎる中に、幸ひ何の恙も無く、學會參列の使命を果たし、剩ヘルテル遺跡の巡禮も終へ、健康を維持して、無事に元の郷國に歸りましたことは、誠に幸福でありました。此の旅中、見聞した點は決して多くはありませんけれど、それでも、日支の事變が歐米各國に與へてゐる影響や、14年ぶりに見る中歐のありのまゝの姿、又、昨年から今年へ僅か一年の間にも變化の激しい米國の社會事情など、旅でなければ獲られぬ印象を経験したのは有意義でありました。(終)

長 田 政 二 氏 逝 く

米國の南カリフォルニアに於いて大きい農業を經營する傍ら、天文學の趣味に生き、1931年には一新彗星を發見して、永く學界に其の名を残し、尙ほ、我が邦人のために外國に於いて氣を吐きつゝあつた本會員長田政二氏は、去る9月8日、ロスアンゲルスの病院に於いて長逝したとの報知を Howard 氏から得た。哀悼に堪えない。長田氏は、人としても、天文家としても、既に可なり廣く知られた南加の名物男であつて、自分が近年渡米する度毎に必ず遠い其の農場からやつて來て、互ひにロス市で會ふことを楽しんでゐた純眞な人であつた。本會の米國支部幹事であり、又、米人社會のためにも献身的な人であつた。「天界」第11卷以來、屢々氏の寫眞や記事があり、最近は第207號にも口繪寫眞として現れてゐる。(山本記す)